

世代間比較による友人関係の特徴について

The generational comparison of friendship

本田 周二¹

¹大妻女子大学人間関係学部

Shuji Honda¹

¹Faculty of Human Relations, Otsuma Women's University

2-7-1 Karakida, Tama-shi, Tokyo, Japan 206-8540

キーワード：友人関係，世代間比較，ウェブ調査

Key words : Friendship, Generational comparison, Web research

抄録

本研究は、世代間比較によって友人関係の特徴について明らかにすることを目的とする。友人関係は日々の生活を営む中で重要な関係性の一つとして考えられており、心理学の分野においてこれまで数多くの研究が蓄積されている。しかし、友人関係研究には「友人」の定義が不一致のまま研究が蓄積されているという批判や、友人関係研究のほとんどが、児童期、青年期を対象に行われており、知見の一般化可能性に問題があると指摘されている。そこで、本研究では、ウェブ調査を用い、20代～60代までの多世代を対象とし、世代間による友人関係の概念整理および特徴について検討することとした。200名を対象としてウェブ調査を行った結果、学生時代から付き合い合っている友人の数と携帯電話に登録している友人の数は、前成人期（23歳～34歳）が多いという結果など世代間による違いがいくつか見られた。一方、異性の友人の数、学生時代以降から付き合い始めた友人の数、そこまで仲良くないけれども付き合い合っている人の割合は発達段階による違いは見られないなど、世代間で共通している特徴も明らかとなった。今後は、質問紙調査やインタビュー調査など他の調査手法を用いて同様の結果が得られるのかについて検討することや青年期のデータとの比較を行うことによって世代間の友人関係の特徴をさらに整理していくことが重要であろう。

1. 問題および目的

本研究は、世代間比較によって友人関係の特徴について明らかにすることを目的とする。人は、日々様々な対人関係の中で生活をしているが、友人関係はその中でも重要な対人関係の一つとして考えられている。このことは、心理学の分野に限らず、社会学や哲学、文化人類学など多様な領域において長い歴史の中で友人関係がテーマとして挙げられてきたことから理解することが可能であろう。友人関係はすべての世代において有益な関係であると考えられるが、中でも、高校生や大学生などに代表されるような青年期においては、他の年代に比べて友人関係が非常に重要な役割を果たしている^{[1][2]}。友人関係といえば、同性友人関係を指すことが多く^[3]、様々な研究から同性の友

人関係が個人にとって大きな支えになることが示されている^[4]。本田^[5]は、日本における青年期の友人関係研究のレビューを行い、友人関係の特徴についてまとめている。それによると、青年期における友人関係の特徴とは、個人の精神的健康を促進し^[6]、情緒的な拠り所となる関係であり^[7]、友人と親密で深い関係を築くことが望ましいと考えられている。

しかし、友人関係研究には「友人」の定義が不一致のまま研究が蓄積されているという批判がある^[8]。多くの研究が、友人とは何かを定義することなく実施されているため、「友人」が意味する対人関係の範囲が広く^[9]、研究の数は多いが、知見の整理がなされていない。また、友人関係の研究はほとんどが、児童期、青年期を対象に行われており、他の世代の友人関係に関するものは、一部、

高齢者を対象にした研究（例えば、丹野^[10]）を除き、ほぼ見られない。これは研究において得られた知見の一般化可能性という観点からも改善していく必要があるだろう。

そこで、本研究では、ウェブ調査を用い、20代から60代までの多世代を対象とし、世代間による友人関係の概念整理および特徴について検討することを目的とする。なお、本研究では、世代をエリクソンの心理社会的発達理論を参考に、前成人期（23歳～34歳）、成人期（35歳～60歳）、老年期（61歳～）に分けて、比較検討を行うこととする。

2. 方法

2.1. 調査対象者

インターネットリサーチ会社“クロス・マーケティング”のアンケートモニター（2,028,592名、2017年8月12日現在）から22歳以上70歳未満の成人サンプルを抽出し、調査ページのURLを含むメールを配信した。そのうち、200名（男性100名、女性100名：20代40名、30代40名、40代40名、50代40名、60代40名）から回答を収集した。居住地は39都道府県、平均年齢は45.1歳（ $SD=13.79$ ）であった。なお、データ品質の劣化を防ぐため、調査項目にダミー項目を加え、矛盾していたアンケート回答者は排除できるようにした。

2.2. 調査時期

2017年8月4日にメール配信し、8月7日に完了した。

2.3. 調査内容

【友人関係に関する質問】

1) 友人の数、2) 異性の友人の数、3) 学生時代から付き合っている友人の数、4) 学生時代以降に付き合っている友人の数、5) 携帯電話に登録している友人の数、6) 友人の中でそこまで仲が良くないけれども付き合っている友人の割合（親しくない友人の割合）、7) 生活満足感尺度（鈴木^[11]）の下位尺度である友人関係満足感、8) 一般的信頼尺度（山岸^[12]）、レジリエンス（小塩ほか^[13]）についてたずねた。

【フェイスシート】

1) 性別、2) 年齢、3) 住居地域、4) 結婚の有

無、5) 子どもの有無、6) 職業についてたずねた。

3. 結果と考察

3.1. 発達段階ごとの友人数

発達段階によって友人数等に違いが見られるかどうかを検討するために分散分析を行った（表1）。その結果、学生時代から付き合っている友人の数（前成人期>成人期、老年期）と携帯電話に登録している友人の数（前成人期>老年期）に発達段階による違いが見られた。また、有意傾向ではあるが、友人だと思える人の数（前成人期>成人期）にも違いがみられた。学生時代から付き合っている友人の数と携帯電話に登録している友人の数は、前成人期（23歳～34歳）が多いという結果が得られており、前成人期（ $M=11.04$ ）、成人期（ $M=3.61$ ）、老年期（ $M=2.42$ ）を比べると、30代半ばを超えたところで友人の数が一定になるようである。友人の数は年代によって明確に違いが見られることが明らかとなった。一方、異性の友人の数、学生時代以降から付き合い始めた友人の数、そこまで仲良くないけれども付き合っている人の割合は発達段階による違いは見られなかった。そこまで仲良くないけれども付き合っている人の割合がどの発達段階においても約3割という結果は、従来の親密な友人関係では捉えきれない友人関係が存在していることを示唆しているものと考えられる。岡田^[14]や本田^[15]は青年期を対象とした研究によって、内発的ではなく、外発的に動機づけられた友人関係の存在を明らかにしているが、青年期以降においても同様の存在が見られるのかもしれない。

3.2. 発達段階による友人の数に対する考え

次に、発達段階による友人の数に対する考えの分析結果について述べる（表1）。友人の数が多い方が良いと思うかについて、成人期よりも老年期の方が得点が高いことが明らかとなった。また、友人の数が多いと思う人数に関しては、有意傾向ではあるが、老年期よりも前成人期の方が高かった。友人の数が多いと思う人数について、どの発達段階においてもバラツキが大きくなっており、この点が従来の研究から指摘されている友人の定義の問題と関連しているものと考えられる。また、友人の数が多い方が良いと思う数値が老年期において一番高いにもかかわらず、携帯電話に登録し

ている友人の数や学生時代から付き合いしている友人の数が前成人期よりも少ないことを考えると、老年期は友人の数という視点からみると、満たされていないと感じている人が多い可能性がある。この点は今後も着目していくことが重要であろう。

3.3. 発達段階ごとの一般的信頼感、レジリエンスについて

次に、発達段階のよる一般的信頼感、レジリエンスの違いについて述べる(表1)。一般的信頼感、レジリエンスどちらに関しても、前成人期よりも老年期の方が数値が高かった。一般的信頼感やレジリエンスは年齢を重ねることによって高まっていくものだと考えられる。

3.4. 発達段階ごとの各変数との関連について

各変数に関して、変数間の関連を発達段階ごとに相関分析により検討した(表2~表4)。その結果、発達段階に関わらず正の関連のあるものは、友人だと思ふ人の数と異性の友人数、学生時代から付き合いしている友人数、学生時代以降から付き合いしている友人数、友人の数が多いと思ふ友人数、友人関係満足感、レジリエンスであった。また、どの世代においても友人関係満足感とレジリエンスとの間に正の相関が見られていた。友人の数が多いことは当人に一定の効果があるものと考えられる。

発達段階で異なる関連としては、前成人期と老年期において有意な関連がみられた。前成人期に関しては、携帯電話に登録している友人数と親しくない友人の割合($r=.44$)、友人が多い方が良いと思ふかと親しくない友人の割合($r=.37$)の関連であった。友人の数が多い人は、必ずしも親密な関係性で満たされているわけではないことが明らかとなった。老年期に関しては、友人だと思ふ人の数と携帯電話に登録している友人数($r=.57$)、親しくない友人の割合($r=.41$)、友人の数が多い方が良いか($r=.58$)との間に正の相関、携帯電話に登録している友人数と学生時代から付き合いしている友人数($r=.43$)、学生時代以降から付き合い始めた友人数($r=.43$)との間に正の相関、学生時代以降から付き合い始めた友人数と一般的信頼感($r=.44$)の間に正の相関が見られた。老年期において、対面だけではなく、携帯電話をうまく利用しながら友人との関係を維持していると考えられる。しか

し、本研究はウェブ調査であり、もともと携帯電話等に慣れ親しんでいる人たちの回答であることは留意する必要があるだろう。

3.5. 本研究の課題と今後の展望

本研究の課題と展望について述べる。まず、ウェブ以外での調査の必要性が挙げられる。本研究ではウェブ調査を用いて検証を行ったが、質問紙調査やインタビュー調査など他の調査手法を用いて同様の結果が得られるのかについて検討することが必要であると考えられる。また、青年期のデータとの比較も重要であろう。最後に、今回は主に友人関係の量的な側面に焦点をあてて検証を行ったが、今後は友人関係の質的な側面(定義や機能など)に焦点をあてて検証することによって、世代間の友人関係の特徴をより精緻に整理することが可能となるであろう。

付記

本研究は大妻女子大学戦略的個人研究費(課題番号:S2943)の助成を受けたものである。

本稿は、「本田周二 世代間比較による友人関係の特徴について. 日本青年心理学会第25回大会発表論文集. 2017」として発表されたものを加筆修正したものである。

引用文献

- [1] 福岡欣治ほか. 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャルサポートとそのストレス緩和効果. 心理学研究. 1997, 68(5), p.403-409.
- [2] 遠矢幸子. “友人関係の特性と展開”. 親密な対人関係の科学. 誠信書房, 1996, p.90-116.
- [3] 和田実. 同性友人関係: その性および性役割タイプによる差異. 社会心理学研究. 1993, 8(2), p.67-75.
- [4] Catherine L. Bagwell et al. Friendship quality and perceived relationship changes predict psychosocial adjustment in early adulthood. Journal of Social and Personal Relationships, 2005, 22, p.235-254.
- [5] 本田周二. 日本における友人関係研究の動向. 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクシオン・リサーチ・センター研究年報. 2009, 6, p.73-80.
- [6] 丹野宏昭. 友人との接触別にみた大学生の友人関係機能. パーソナリティ研究. 2007, 16(1), p.110-113.

[7] 柴橋祐子. 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因, 教育心理学研究. 2004. 52(1), p.12-23.

[8] Roberto, K. A et al. Friendship in later life : Definitions and maintenance patterns. International Journal of aging & human development. 1989, 28, p.9-19.

[9] 宮本聡介. 親しくない友人が「友人」でありうる条件. 日本社会心理学会第 48 回大会発表論文集. 2007, p.522-523.

[10] 丹野宏昭. 高齢者の QOL に果たす友人関係機能の検討. 対人社会心理学研究. 2010, 10, p.125-129.

[11] 鈴木有美. 自尊感情と主観的ウェルビーイングからみた大学生の精神的健康 : 共感性およびストレス対処との関連. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学). 2002, 49,

p.145-155.

[12] 山岸俊男. 信頼の構造 : こころと社会の進化ゲーム. 東京大学出版, 1998.

[13] 小塩真司ほか. ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性 - 精神的回復力尺度の作成 -. カウンセリング研究. 2002, 35, p.57-65.

[14] 岡田涼. 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討 - 自己決定理論の枠組みから -. パーソナリティ研究. 2005, 14(1), p.101-112.

[15] 本田周二. 友人関係における動機づけが対人葛藤時の対処方略に及ぼす影響. パーソナリティ研究. 2012, 21(2), p.152-163.

表1 発達段階ごとの友人数, 友人に対する考え方, 友人関係満足感, 一般的信頼感, レジリエンス

	前成人期 (23歳～34歳 : 56名)		成人期 (35歳～60歳 : 104名)		老年期 (61歳～ : 38名)		有意差の見られたもの
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
友人だと思ふ人の数	15.23	40.85	6.91	11.12	5.11	4.58	前成人期>成人期 [†]
異性の友人の数	3.96	14.04	1.20	3.22	0.82	1.72	
携帯電話に登録している友人の数	46.36	58.29	33.69	65.68	14.55	19.58	前成人期>老年期 [*]
学生時代から付き合い合っている友人の数	11.04	27.57	3.61	6.99	2.42	3.22	前成人期>成人期、老年期 [*]
学生時代以降から付き合い始めた友人の数	4.20	14.38	3.31	4.79	2.68	2.81	
そこまで仲良くないけれども付き合い合っている人の割合	3.11	3.25	3.44	3.07	3.45	3.27	
友人の数が多くの方が良いと思うか	1.96	1.06	1.92	0.97	2.39	1.13	成人期<老年期 [*]
あなたにとって友人の数が多くと思う人数	58.55	147.83	29.60	32.04	17.13	31.79	前成人期>老年期 [†]
友人関係満足感	3.43	0.89	3.50	0.74	3.70	0.60	
一般的信頼感	2.77	0.93	2.94	0.81	3.24	0.75	前成人期<老年期 [*]
レジリエンス	2.90	0.75	3.10	0.60	3.28	0.53	前成人期<老年期 [*]

[†] $p < .10$, ^{*} $p < .05$

表2 友人数、友人に対する考え方、友人関係満足感、一般的信頼感、レジリエンスの関連（前成人期）

	友人数	異性の友人数	学生時代からの友人数	学生時代以降の友人数	携帯電話に登録している友人	親しくない友人の割合	友人数が多い方が良いか	多いと思う友人数	友人関係満足感	一般的信頼感	レジリエンス
友人数	—	.98 **	.99 **	.95 **	.21	.01	.11	.42 **	.30 **	.04	.35 **
異性の友人数		—	.97 **	.94 **	.16	.01	.12	.42 **	.24	.01	.30 *
学生時代からの友人数			—	.89 **	.23	.03	.11	.41 **	.31 *	.06	.35 **
学生時代以降の友人数				—	.15	-.01	.09	.40 **	.02	.01	.32 *
携帯電話に登録している友人					—	.44 **	.23	.47 **	.23	.14	.16
親しくない友人の割合						—	.37 **	.23	.03	.23	.06
友人数が多い方が良いか							—	.17	.28 *	.23	.38 **
多いと思う友人数								—	-.13	-.22	-.12
友人関係満足感									—	.38 **	.47 **
一般的信頼感										—	.40 **
レジリエンス											—

**p<.01, *p<.05

表3 友人数、友人に対する考え方、友人関係満足感、一般的信頼感、レジリエンスの関連（成人期）

	友人数	異性の友人数	学生時代からの友人数	学生時代以降の友人数	携帯電話に登録している友人	親しくない友人の割合	友人数が多い方が良いか	多いと思う友人数	友人関係満足感	一般的信頼感	レジリエンス
友人数	—	.91 **	.96 **	.92 **	.14	.08	.13	.45 **	.30 **	.17	.24 *
異性の友人数		—	.87 **	.85 **	.13	.08	.10	.34 **	.21 *	.11	.20 *
学生時代からの友人数			—	.77 **	.17	.09	.11	.48 **	.26 **	.16	.22 *
学生時代以降の友人数				—	.09	.06	.15	.35 **	.31 **	.16	.23 *
携帯電話に登録している友人					—	.16	.15	.11	.02	.03	.01
親しくない友人の割合						—	.05	.06	-.09	.04	.08
友人数が多い方が良いか							—	.16	.14	.27 **	.10
多いと思う友人数								—	.13	.11	.11
友人関係満足感									—	.25 **	.36 **
一般的信頼感										—	.37 **
レジリエンス											—

**p<.01, *p<.05

表4 友人数、友人に対する考え方、友人関係満足感、一般的信頼感、レジリエンスの関連（老年期）

	友人数	異性の友人数	学生時代からの友人数	学生時代以降の友人数	携帯電話に登録している友人	親しくない友人の割合	友人数が多い方が良いか	多いと思う友人数	友人関係満足感	一般的信頼感	レジリエンス
友人数	—	.72 **	.80 **	.72 **	.57 **	.41 *	.58 **	.34 *	.43 **	.29	.41 *
異性の友人数		—	.63 **	.45 **	.20	.25	.37 *	.04	.30	.05	.29
学生時代からの友人数			—	.15	.43 **	.49 **	.50 **	.15	.33 *	.03	.35 *
学生時代以降の友人数				—	.43 **	.10	.38 *	.38 *	.32 *	.44 **	.27
携帯電話に登録している友人					—	.25	.28	.80 **	.11	.21	.20
親しくない友人の割合						—	.19	.06	.10	.13	-.05
友人数が多い方が良いか							—	.15	.19	.28	.20
多いと思う友人数								—	.07	.16	-.01
友人関係満足感									—	.13	.59 **
一般的信頼感										—	.29
レジリエンス											—

**p<.01, *p<.05

(受付日：2018年4月24日，受理日：2018年5月7日)

本田 周二（ほんだ しゅうじ）

現職：大妻女子大学 人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻 専任講師

東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻博士後期課程修了。

専門は社会心理学。現在は友人関係に関する社会心理学的研究と同時に、アクティブラーニングやキャリア教育に関する研究を行っている。

主な著書：公認心理師必携テキスト（共著，学研メディカル秀潤社），アクティブラーニング型授業としての反転授業—理論編—（共著，ナカニシヤ出版）